

■人間研究学域

〔教学目標〕

「人間研究学域」は、「哲学・倫理学専攻」と「教育人間学専攻」から成り立ちます。両専攻は、文学部人文学科の中心問題である〈人間〉を軸にして、いわば双方向的に学びを展開します。哲学・倫理学専攻は、〈人間〉をとおして、存在、価値、美、自己、他者、社会、自然、生死、倫理などの事象を探究します。すべての根源に向かうこの専攻では、人間を支えるこれらの根本的な事象をめぐって、深く鋭い洞察力、生ける豊かな知識、あふれる創造力が養われます。教育人間学専攻は、人間形成、臨床教育、心、意識、身体、病理、癒し、心理健康などの事象をとおして、〈人間〉を統合的に探究します。実験・実習系としてのこの専攻では、その自己成長や心身技法に関わるさまざまなスキル（技術）を体験的に学ぶことができます。学域全体では、現代の切迫した問題を、表面的、流行的、一時的な見方にとらわれず、より根本的な次元に立ちかえってとらえなおし、そこから人間の可能性、人知の可能性を創造的に切りひらいていくことを重視します。

（哲学・倫理学専攻）

【教学理念・目標】

哲学は2600年の歴史を有する最古の学問です。2600年以上にわたる各時代の最高の知性による思索の重層的な積み重ねが哲学の世界を形成しています。したがってその学問内容は、深さ・量ともに圧倒的であり、哲学がみなさんの知的情熱を裏切ることは決してありません。存在の問題、価値の問題、美の問題、神の問題、人生の問題、社会の問題その他およそ人間として問わねばならない問題のすべてが哲学という学問の対象であり、内容です。各時代を代表する偉大な哲学者たちの思索に親しむことによって、みなさんはおそらく世界を知り、人生の深みを見ることでありましょう。

哲学・倫理学専攻での学びの目標は、人間および世界のあり方について知見を深めるとともに、自ら考える力を身につけることです。すでに敷かれたレールの上を何も考えずに歩むだけで、本当に自分の人生といえるでしょうか。

自分の頭で考えてこそ、借り物ではない自分の思考、自分の人生といえるのです。そこで、そのために、4年間の学びをとおして、次の能力を修得していくことになります。

1. 存在の問題、価値の問題、人生の問題、社会の問題などについて興味・関心をもち、自分にとって、人間にとって問うべき重要な問題を見つける能力、すなわち問題発見能力を身につけます（関心・意欲）。
2. その問いについて2600年の哲学・倫理学の歴史および現在進行中の哲学・倫理学の営みのなかから重要な手がかりを見つけるべく、文献を適確に理解し、哲学的・倫理的知見を深めます（知識・理解）。
3. それをもとに自ら考える力、とりわけ既成の思考にとらわれない柔軟な思考をする力、そしてまた論理的に思考する力を身につけます（思考・判断）。

4.最後に仕上げとして、その成果を他の人にわかってもらえるように伝える表現能力を身につけます（技能・表現）。

以上のような問題発見能力、しっかりとした理解力と豊かな知見、柔軟かつ論理的な思考力、表現力・伝達力、これらを4年間で身につけることにより、自分自身の人生を切りひらき、社会のさまざまな領域において活躍できる人間となることができるでしょう。

（教育人間学専攻）

【教学理念・目標】

「いったい人間とは何なのでしょう」、「なぜ人間には教育が必要なのでしょう」、「心とは如何なるもので、その心を育てるとはどういうことなのでしょう」、「精神的に健康に生きるとはどのように生きることなのでしょう」。

私たちは現代教育の危機的状況に取り組むために、もう一度こうした根源的な問いかけから始め、遠い過去から現代に至るまで連綿と続けられた先人たちの人間探究の成果を辿りなおすと同時に、今まさに私たちの目の前で起こっている日々の現実から学ぶ必要があるといえるでしょう。本専攻は、基礎的理論に関わる領域としての「人間形成」、現代的課題もしくは実践的課題に関わる領域としての「臨床教育」、さらに総合的な人間発達に関わる領域としての「心理健康」という緊密に連携した3領域の専門スタッフと、各領域に対応した実習室を備え、皆さんが幅広い視野から「教育人間学」を学ぶことのできる環境を整えています。

本専攻が養成する人材像は次のとおりです。

1. 既存の学問的・社会的通念を批判的に問い直すなかで、新たな「心の教育」の可能性を理論的・実践的に探究することができる。
2. 「人間形成」、「臨床教育」、「心理健康」という3つの観点から、多面的に人間・教育・心について考察することができる。
3. 実験や実習により身に付けた知識と技能を将来実践に活かすことができる。
4. 教員や友人との議論や交流を通して自分自身の見識に磨きをかけ、さらに自らの身体や心を体験に投じることによって、独自の人間観、教育観を育むことができる。

■日本文学研究学域

〔教学目标〕

文学部の教育研究上の目標として以下の6項目が掲げられていることは前に記してありますが、いま確認のためにこれらを再度見ていただきたく、これらの事項を十分にふまえたうえでの日本文学研究学域の教学目标を具体的に述べることにします。

文学部の教育研究上の目的

- ・ 人間や世界の様々な文化について幅広い知識を身につけ、人文学の基本的思考を用いて理解する。（知識・理解・想像力）
- ・ 現代・過去の社会や文化に対して多面的な関心を持ち、自らの見解を形成する。（思考・判断）
- ・ 個人や文化の多様性を認め、社会の一員として行動する。（思考・判断）
- ・ 人間や文化について関心を持ち、自らの力で課題を設定し探求する意欲を持つ。（関心・意欲）
- ・ 現代社会が抱える問題に対し、大学で学んだことをもとに解決する態度を築く。（態度）
- ・ 自分の調査・研究の結果を、口頭あるいは文章や制作物の形で表現する。（技能・表現）

日本文学研究学域はその名称の通り、日本の文学と文化情報を総合的に研究することを目標としています。しかしながらこれを子細に見た場合、「日本」をどう捉えるか、また、「日本文学」、「日本文化情報」をいかに把握して研究するか、そしてそれらをいかに研究として発信していくのが基本的に問われなければならない重要なことです。本学域では従来、日本文学専攻として展開してきた教学内容を、さらに深化、拡充させようと考え、また、今日的な課題を背景に国際化する中での「日本文学」や「日本文化情報」を歴史的視野や空間的視野、さらには社会的視野などを研究方法として組み込むことを教学の基盤に据え、教員と学生が協同の場で真摯に学んでいきたいと願っています。その主たる目標は以下の通りです。

日本文学や日本語学、書誌学、文献学、図書館情報学に関わる専門的な知識を広い範囲において獲得し、その概要を体系的に理解し、主体的に学ぶ力を養成します。

学修によって得られた知識を活かして、自己をとりまく文化・社会・歴史的な動向に関心を持ち、適切な分析や認識ができる力をつけます。広く国際的視野に立って、日本文学や日本語学、図書館情報学を幅広く学び、それらを的確に把握する能力を身につけます。

日本文学や日本語学、図書館情報学で学んだ知識を創造的な態度でまとめ、主体的かつ正確に表現する力を養成します。日本文学や日本語学、図書館情報学で学んだ成果を他の学問領域に援用し発展させる能力や応用力を身につけます。

（日本文学専攻）

【教学理念・目標】

名称が示す通り、古代から近現代にかけて、主として日本で創作された文学作品について多方面からの分析・検討を行い、より深い読解を試みることを基本としています。日本文学作品を生

みだした作家やその作家をとりまく時代環境、文学思潮や地理的な環境などをも視野に入れながら多様な研究を模索します。海外にあって誕生した日本文学や、日本語に翻訳された作品、さらには日本と言う特定の地域にとどまらず、諸外国との関わりや文化的な相互影響なども幅広く考察します。古事記・万葉集成立の時代や源氏物語なども、日本文学は近隣の文化と深く交流しつつ展開していき、現代に読み継がれています。そしてその影響下に多くの作品も誕生しました。したがってこれらの作品を理解することは、周辺にあるアジア文化圏や欧米文化圏などの当時の文学状況を考察することにもなります。これらの課題をも取り込みつつ作品を学ぶことは、同時にその背景に存在する豊かな人間の交流と文化とを丸ごと把握することに他なりません。きわめてすぐれた営為なのです。先人の研究に学びつつ自分自身の読みを構築する学問領域です。

(日本文化情報学専攻)

【教学理念・目標】

作品にこめられているさまざまな時代思潮や文化は、それを構築している言語や文章の綾織模様にも色濃く反映されています。言語や文章について深い思索を巡らすことから始まった先人のすぐれた研究手法に学びながら、近年のめざましい情報処理技術を応用して作品に盛り込まれたことばや表現を分析し読解をおこなっていきます。さらに、日本語を語学的研究対象として通時的・共時的な視点から考察を試み、その背景にある人間の文化や交流展開のありようを学びます。また、典型的な文化情報の集積物としての書籍自体を現代的方法によって整理・保管する方法を考察したり、書誌を学ぶことで書物の伝流や流通などを研究します。古代における書写、近世期における絵画や書物の出版技術などの研究から、さらには電子出版など近年大きく変貌を遂げつつある書籍形態を多様な文化情報資源として捉え、その展開の諸相を周辺に存在する複雑な文化事象を取り込みながら複合的な視点から読み解きます。現代さらには将来の日本語や日本文化を学び、加えて書籍保管や図書館のありかたなどについても研究するきわめて今日的な学問領域なのです。日本語学の面では、語彙・語法・位相・方言・音韻など日本語情報に関する基礎的研究課題が多くあります。各々の課題について、最近の研究を織り交ぜながらさまざまな視点から幅広く捉え、人間と言語と社会とを有機的に学ぶことを目標とします。日本の文化を情報資源ととらえ、多くの問題への知識と関心を深め、日本の文化展開への理解と国際的な視野を拡げ、考察し発信する能力を養成します。

■日本史研究学域

〔教学目標〕

日本史研究学域は、日本の政治・経済・社会・文化・思想など諸分野の歴史的展開と、これを取り巻く国際的諸条件の全体像を明らかにすることを目的としています。

当学域は文書史料を主として研究する日本史学専攻と、遺跡・遺物などを主として研究対象とする考古学・文化遺産専攻の2専攻により構成されていますが、共に歴史学的手法を中心に研究を進めていく点が共通しており、1回生時は歴史学としての日本史について、基本的な理念や手法を幅広く学んでいくことになります。歴史学は決して過去の事象を学ぶことだけが目標ではありません。そうした研究を通じて、現在の日本社会が抱える様々な構造的矛盾や問題に気づき、それを変えていくための大胆なアイデアを打ち出すことで、未来への展望を切り開く役割も担っています。また「世界」の在り方が歴史的にどう変化していき今があるのか、その中において「日本」はどのような役割を果たしていく必要があるのかなど、国際的視野を形成していくことも求められています。

当学域で学んだ学生諸君が、歴史的視点から物事を独自の見方でとらえられるようになること、問題点を長いタイムスパンの中で立体的にとらえ、鋭い解決策を提示していけるようになること、そうした能力を基に社会の様々な分野で活躍していくことを期待しています。

（日本史学専攻）

【教学理念】

立命館大学文学部日本史学専攻は、古代から現代にいたるすべての時代に対応して一名以上の教員が配置され、また文化史などの特殊分野を専門とする教員のゼミも開講されているなど、学生の幅広い学びの希望に対応できるプログラム作りがなされています。

古くから「立命史学」と呼ばれる歴史と伝統を持ち、学界で活躍する研究者を多数輩出してきた専攻であり、特に思想史、社会史、文化史などに優れた研究成果を残してきましたが、近年は政治史、経済史などの分野においても新しい学問分野を切り開く研究が展開されています。

本専攻では日本史学の研究方法や研究成果について、鋭い批判を加えつつ継承し、さらに新たな方向へ展開させられる有為な人材を育て、日本史学の発展に寄与したいと考えています。また現代の日本社会が抱える様々な課題について、歴史的経緯を踏まえてその原因を深く分析し、どのような対応を行うことで未来を変えていけるのか、きちんと考えることのできる人材を育て、社会へ送り出していきたいと考えています。そのために様々な専門科目が配置され、また卒業論文作成を通じて、四年間にわたる学問的修養の成果を、一つのオリジナリティーある作品に仕上げていく面白さと困難さを経験していただきます。学生諸君がこうした学びに積極的に取り組んでくれることを本専攻は期待しています。

【教学目标】

1. 日本史に関する研究方法や研究成果を幅広く理解する。
2. 日本史に関わる事象について、日本史の研究方法を用いて分析し、主体的で創造的な見解を形成できる。
3. 現代や過去の世界について、日本史の研究成果を参照しながら、歴史的に問題を考察することができる。
4. 日本史の研究方法や研究成果に対して積極的に関心を持ち、その妥当性を意欲的に検討する。
5. 日本史の研究方法や研究成果と、現代社会の抱える問題との関係を積極的に見出し、歴史的観点から問題解決の方向を探る。
6. 日本史の研究方法を習得するとともに、研究成果を口頭および文章で論理的に発表できる。

(考古学・文化遺産専攻)

【教学理念】

考古学は、人類が残した物質的資料を発掘し、調査し、研究することにより、日本の成り立ちや歴史を明らかにすることを目指しています。文字や言葉が残っていない過去を知ることにより、また、文字や言葉ではわからない社会の側面を知ることにより、幅広い視野を獲得できます。また、日本という現在の領域に縛られず、周辺地域や世界に広く目を向け、日本を客観的に理解する必要があります。本学では日本考古学を通史的に学ぶだけではなく、東アジアや世界にも目を向けた教育を行っています。考古学が研究対象とする遺跡や遺物は、人類共有の「文化遺産」と呼ばれるものです。考古学の研究は文化遺産なしには成り立ち得ないので、文化遺産の社会的価値を認識し、その価値を社会に広く還元する必要があります。そのためには、文化遺産としての遺跡や遺物を調査する方法を身につけるだけではなく、それを社会に生かす方法を学ぶ必要があります。本学では、遺跡発掘や出土品の整理作業などを含む考古学実習などの授業を通じて、実践的な調査方法や自然科学的研究を学ぶことができるとともに、学芸員課程の授業とも関連したカリキュラムの中で、博物館業務をはじめとする文化遺産の活用を必要とする様々な仕事に役立つ実践的な教育を行います。

【教学目标】

1. 考古学・文化遺産の基礎をなす知識を有し、他の人文的知と連携させることができる。
2. 考古学・文化遺産における専門的な知識を有し、さらにそれを高度化することができる。
3. 考古学・文化遺産の資料を読み解き、批判的に理解することができる。
4. 自らの研究成果や見識を、言語や図像を駆使して効果的に表現することができる。
5. 自らの研究成果や知識を、社会における様々な活動に活かす意欲を有する。
6. 国際的な感覚を身につけ、多様な伝統や文化を尊重することができる。

■東アジア研究学域

〔教学目標〕

現在、アジア諸国の発展に伴って我が国は新たな国際戦略が求められていますが、そのためには、アジア諸国の歴史や文化を深く理解する必要があります。また、西洋近代文明発展の結果として現在、地球規模でさまざまな問題が発生していますが、西洋とは根本的に異なるアジア的発想にはそれを解決できる可能性があります。そのような意味で、中国を中心とする東アジア地域を地理的範囲とし、その歴史や言語、伝統的文化から現代の文化までを幅広く研究対象とする東洋研究学域は、すぐれて現代的要請に応える研究学域といえます。

東アジア研究学域は、中国文学・思想専攻、東洋史学専攻、現代東アジア言語・文化専攻の三専攻で構成されますが、本学域における教学は、中国・朝鮮・日本の三地域にかつて展開した漢字文化圏の伝統社会・文化の研究と、その基礎の上に地域ごとに独自に発展した中国・朝鮮半島の現代文化の研究を二本柱とし、これらが相互に密接に連携した形で展開されます。すなわち、伝統的な文化と前近代の歴史を研究対象とする中国文学・思想専攻と東洋史学専攻は常に現代東アジアの動向を踏まえ、一方、現代東アジア言語・文化専攻は常に伝統文化と歴史を踏まえた上で、それぞれの専攻教学が展開されるのです。東アジアの過去を見ながら現代を学び、現代を見ながら過去を学ぶ。本学域は、そのような学びを通して、これからのアジアを担ってゆく人材の育成を目指します。

本学域における教学の目標は次の通りです。

- ・ かつて中国を中心として東アジア地域に存在した「漢字文化圏」において形成された伝統文化や、現在の東アジア諸地域において展開している現代文化に関する幅広い知識を身につける。
- ・ 東アジア地域の人々と交流するための高度な語学力を身につける。
- ・ 東アジアの伝統文化・現代文化に関する豊かな知識や、東アジア諸言語の高度な運用能力を基礎として、この地域に存在するさまざまな問題を解決して東アジア地域の未来を切りひらく力を身につける。

(中国文学・思想専攻)

【教学理念・目標】

東アジアは世界に誇る文化圏です。この地域のそれぞれの民族は独自の文化を発展させてゆきつつも、互いに漢字文化によって結ばれていました。漢字文化の発源地は中国です。漢字は古代中国に生まれ、後に字体は変わることがあっても今日まで用い続けられ、約3000年の間にすぐれた文学や思想が多く生まれました。司馬遷、陶淵明、李白、杜甫、白楽天、蘇東坡、劉備・諸葛孔明等が活躍する小説『三国志演義』、近代の魯迅、また孔子、老子・莊子の思想など数えきれません。これほどの歴史と豊かさをもつ文学・思想は、他に見られないでしょう。中国の文学や思想は、漢字文化圏の他民族に大きな影響を及ぼしてきました。そして現代の日本にも漢字文化が深く根付いていることは言うまでもありません。

中国の文学・思想は世界に誇るべき人類の文化遺産であります。伝統をよく理解し、今を見据えてこそ、未来の展望が開けるものです。ここに中国文学や思想を学ぶ大きな意義があります。中国では古代から現代に及ぶまで、文学、思想あるいは文化・芸術の領域に興味深い人間の営みが多様に表されています。人の世のことは、おおよそ中国に備わると言えるほどです。学生諸君それぞれの知的関心は本専攻の学修を通して満たされ、そして培われた人間考察は、将来いずれの分野で活躍する場合においても有意義に違いないでしょう。4年間の系統的な学びを通して、中国の悠久の歴史に育まれた文学や思想に広がるさまざまな問題を探求し、過去から現在に及ぶ文化的営為について、豊かな知識を習得して理解を深め、日本のみならず、世界的な規模で活躍できる人材を育成することを目指します。

具体的には、文学部や学域の人材育成目標に加え、本専攻では次のような人材を養成することを目標としています。

- (1) 中国の文学や思想、言語について、積極的に知識を広げ、理解することができる。
- (2) 中国の文学や思想に対してさまざまな関心を持ち、その関心に応じて諸作品や諸資料を読解して自ら問題点を発見し、調査・研究を進めることができる。
- (3) 中国の文学や思想、言語の学習をとおして、日本をはじめとする周辺諸国や諸外国の文学・思想・言語にも関心を広げ、世界的な視野から比較考察することができる。
- (4) 中国の文学や思想についてのさまざまな研究方法を習得して、研究の成果を口頭や文章で発表することができる。
- (5) 古典および現代の中国語を習得し、中国の文学や思想を理解したり、またコミュニケーションの道具として使用することができる。

(東洋史学専攻)

【教学理念・目標】

21世紀、アジアは急速に経済を発展させ、文化面でも、これまでのもっぱら受け手の立場から、自ら情報発信源として、その存在感を増しつつあります。東洋史学専攻は、このようなダイナミックに変容するアジア社会の歴史的形成過程を起源にさかのぼって研究し、総合的に理解することを目指しています。従来の枠組みや価値基準が揺らぎつつあるなか、西欧文明とは異なる独自の文明を古くから育んできたアジアの歴史に注目が集まっています。その意味でも東洋史学の研究は今日的課題にこたえる学問領域といえます。

東洋史学は私たちにとって基本的に外国史研究ですが、日本がアジアの東端に位置することからすれば、単純に外国史とは言えない部分もあります。とくに東アジア歴史の中核をなす中国は古くから日本と交渉があり、わが国の文化の形成に強い影響をあたえました。東洋史学は私たち自身の歴史を問う営みでもあります。

また、東アジア地域は漢字を共通の基礎としながらも、多様な伝統文化を形成してきました。そうした個性的な文化や人々の生き方を学び理解することで、現代社会に対する柔軟で多面的な視座を手に入れることを目指します。

東洋史学専攻における教学の目標は次の通りです。

- (1) 東洋史上の諸事象について、積極的に知見を広め理解する。
- (2) 東洋史上の諸事象について、歴史学の方法を用いて自ら問題点を発見し、関係史料を収集・解読し、蓋然性の高い結論を出すことができる。
- (3) 前近代の歴史を研究することによって、現代の諸問題についても歴史的観点から考察を加え自分の見解を提起することができる。
- (4) 東洋史学に隣接する人文科学諸領域にも関心を広め、東洋史の特徴を世界的視野のもとで相対化する視座を獲得する。
- (5) 史料読解のツールとして、またはコミュニケーションのツールとして中国語を修得する。
- (6) 東洋史に関する豊かな歴史的知識・発想を身につけ、その教養を生かす職場で活躍することを目指す。

(現代東アジア言語・文化専攻)

【教学理念・目標】

中国・朝鮮半島・日本によって構成される東アジア地域は、漢字文化圏としての共通性を基礎に、人々の直接的往来を通じた深い文化的交流を行なってきました。近年では、人・モノ・資本・技術の国境を超えた移動が進み、錯綜した様相を見せながらも、東アジアという大きな枠組での経済・文化圏（東アジア共同体）が構想されるまでに至っています。現在、東アジアでは、「華流・韓流・日流」が流行語になっているように、大衆文化などを通じた相互交流が活発に進んでいる一方で、過去の歴史や冷戦体制によって生じた未解決の問題も数多く残されています。今後、活発な域内交流を通じて文化の共通性を再発見し、21世紀的な価値観を創造しながら、様々な問題を平和的に解決していくことが期待されているのです。

現代東アジア言語・文化専攻では、越境が進みつつある東アジアという視点から、ダイナミックに変容する中国（台湾と特別行政区としての香港・澳門を含みます）と朝鮮半島における現代的課題について、「言語・文化・歴史」という3つの視角から総合的かつ専門的に学びます。

「言語」では、中国語・朝鮮語の構造について日本語との比較も含めて理解を深めます。「文化」では、中国・台湾・韓国の文化コンテンツ（文学・映画・ドラマ・アニメ・言語など）の分析を通じて各地域の社会生活を理解します。「歴史」では、東アジアの現代史を学びながら過去の対立が今に残す問題を未来志向的に解決する方法を探ります。こうした3つの視角による学びを通じて共通性と多様性を再発見し、東アジアの共生を目指します。

現代東アジア言語・文化専攻では、中国語または朝鮮語の実践的なコミュニケーション能力を培いながら、同時代の東アジア各地域における文化や社会、歴史に対する理解を深めます。また、東アジアの人々と直接触れ合う現地実習プログラムや遠隔講義、「キャンパス・アジア」プログラムなどを通じて、異文化理解と複文化共生について体験的に学びます。こうした実践的な学びを通じて、21世紀のアジア新時代を担い、国際的な舞台上で活躍できる人材の育成を目標とします。

具体的な教学目标としては、以下の課題を実現できる人材の養成を目指します。

- (1) 漢字文化圏としての東アジア伝統文化をめぐる基本的知識を理解した上で、グローバル化によって変容する現代東アジアの現状について理解することができる。
- (2) 現代の中国（台湾を含む）・韓国などの文化コンテンツ（文学・映画・ドラマ・アニメ・言語など）の分析を通じて、各国・地域の社会・生活・歴史・メディア状況を理解することができる。
- (3) 中国語または朝鮮語の実践的学習や現地実習、中国・韓国の大学との遠隔講義などを通じて、東アジアの人々と積極的に交流し、国際的な舞台で活躍することが可能なコミュニケーション能力を身につけることができる。
- (4) 中国・朝鮮半島・日本をめぐる様々な問題について、共通の伝統文化を経験してきた東アジアという視点から分析ができ、未来志向的で平和的・共生的な問題解決を目指すことができる。

■国際文化学域

〔教学目標〕

グローバル化の進む現代においては、世界各地の多種多様な民族や文化が相互に接触・交流しながら影響しあい、一つの運命共同体となりつつあります。このように世界が大きく変化していく中で、人々が他者を尊重しつつ、いかに共生できるかが、現代の人間にとって差し迫った問題となっています。それゆえ、世界の成り立ちを過去から歴史的に理解し、それを踏まえて多種多様な文化と向き合う態度を培うことは、きわめて重要な課題となります。国際文化学域が展開する教学の最大の特徴は、芸術・文学・歴史・思想などの、人間文化・社会の諸領域に関連する諸学問を横断し、さまざまな時代と地域を視野に入れつつ、多様な価値観のもとに世界を深く理解することを目指す点にあります。そのためには、現代の人文諸科学の方法や成果を学び、自らの感性、歴史的・論理的思考力、表現力を高めると共に、英語を軸として、諸外国語の高度な運用能力を習得する必要があります。本学域では、以上のような専門的かつ先端的な人文学諸領域の学習・研究を通じて、国際的な視野と展望を持った人材を育成します。

(英米文学専攻)

【教学理念・目標】

英米文学研究は、英語という一言語の長い歴史の中で生み出された文学作品の魅力に触れながら、多様な視点や価値観を涵養すると共に、様々な時代や地域の違いを超えた人間の普遍性とも出合う学問です。英米文学専攻は、英米を中心とする英語圏の文学作品の研究を通して、英語の言語表現の特性、作品世界を構築する文化的・歴史的背景、そして人間と社会の関係のあり方について理解を深めると共に、言語的感性を高め、異文化への眼差しを育むことを基本理念としています。グローバル社会における共通語としての位置づけが確立された今、英語に対する需要はますます高まっています。英米文学専攻では、「英文演習」「翻訳演習」をはじめとするスキル系科目を開講し、高度なコミュニケーション能力の養成も目指します。その一方で、加速する情報化・国際化の流れに真に対応し得るためには、「読む・書く・聞く・話す」といった4技能の総合的英語運用能力に加えて、他者の考えを正しく理解した上で、深い分析と学識に基づいて自らの考えを言語化する高度な表現力と論理的思考力が求められます。あまたの可能な読みの中から自らの読みを構築し、今度はそれを自らの言葉で肉付けしていく—その創造的な営為は、「グローバル・リテラシー」が単一の価値観を生み出す誤ったグローバリゼーションに墮すことを阻み、他者を受容し、自己を形成する、21世紀に必要とされる真の国際人の育成に大きく貢献するでしょう。

(西洋史学専攻)

【教学理念】

西洋史学専攻では、時代的にも地域的にも、またテーマの上でも、きわめて多様な範囲を扱います。しかし、「なぜ学ぶか」という点では、次の2つのことが共通の目標となります。第一

に、現代世界が歴史的にいかにして形成されたのかを、幅広い視野から理解すること。第二に、「過去」の時代を異なった社会・文化として認識し、それと「現在」の我々の社会・文化と対比することによって、人間の多様な在り方や可能性を知ること。このように歴史を学ぶことによって、自らの思考と感性を磨き、現代社会に生きる力を培うことができるでしょう。

以上の大きな目標に向かって、それぞれの問題意識から特定の時代、領域のテーマを見出し、そこから可能なかぎり全体を見渡せるような歴史的視野を広げていくことが大切です。専門としての歴史研究は、あくまで現代社会に生きるための視野の広さを身につけ、変化に対する鋭敏な感性と異なった社会・時代への豊かな想像力を培うためにこそ、役立たなければなりません。

【教学目标】

- (1) 西欧・中東欧・南北アメリカ、さらには植民地支配下の諸地域なども視野に入れて、世界史的な展望の中で「ヨーロッパ」を理解します。
- (2) 現代世界の歴史的形成を幅広い視野から理解することによって、今日の政治・経済・文化などの多様な問題に対処する力量を身につけます。
- (3) 過去の社会・文化と対比することによって、人間の多様な在り方や可能性に対する関心を深め、「他者」に開かれた感性や想像力を磨きます。
- (4) 調査・研究のための基本的なツールや技術を学ぶと同時に、口頭発表、レジュメ・レポート・論文作成を通じて自分の思考や見解を正確かつ効果的に伝えるコミュニケーション技術を学びます。
- (5) 外国の歴史を学ぶために必要な「話す・聞く・読む」語学力を身につけます。

(文化芸術専攻)

【教学理念・目標】

20世紀は人類世界に大きな変化をもたらしました。さらに9・11同時多発テロ事件をきっかけとして、かつて夢一杯に語られていた21世紀は、先行きの見えない不安にみちた揺れ動く世界になってしまいました。このような状況下で、既成の価値観や生き方に疑問が投げかけられるのは必然といえるでしょう。大学における学問のあり方の問い直しも、そうしたラディカルな問題のひとつです。私たち文化芸術専攻は、すさまじい速度で流動し変化をとげていく世界がかかえる様々な問題に、これまでの学問の枠組みを超えて応えようとする領域です。そのため、「学際的」な立場からものごとにアプローチすることを目的としています。すなわち、さまざまな言語で綴られた物語・宗教信仰・ファッション・暴力といった人間の営み自体やそこで用いられる象徴・音楽・絵画・建築・マンガといった芸術による表象など、多様な文化の交渉や変容のあり方に対して、文化人類学、芸術学、社会学、歴史学、言語学、文学といった学問の中から、ある特定の専門分野を出発点におきながら、それとは別の分野の知見を取り入れ、より広く多様な視点からものごとを横断的にとらえ考察していこうという研究方法を重視します。そのようなアプローチを自らのものとするのは容易ではないかもしれませんが、しかし、自分が世界に向きあうために必要な「ユニークな批判的経験」や、従来の学問分野からは生まれてこなかった

「新しい発見」といった、かけがえのない成果は、こうした取り組みの先に出会うことができるはずだ。

■地域研究学域

〔教学目標〕

地域研究とは、国内外を問わずある特定の地域に起こるさまざまな現象について、詳細に明らかにするアプローチの方法です。地理学をはじめ、社会学、経済学、文化人類学など多様な学問分野で取り組まれており、研究対象についても、自然現象から人文現象まで幅広く扱われています。きわめて学際的な性格を持つ地域研究は、わが国においては世界の諸地域に関する研究とその成果として得られた知見の普及を目的として、グローバリゼーションに追随するような形で発展してきました。

わが国の地域研究は、実際にその地域に足を運んで研究を行なう、すなわちフィールドワークを第一の特徴としています。これは、地域間の協働や相互理解が目標の念頭に置かれているためであり、このことは第二の特徴ともいえます。地域間の協働は、相手の地域で営まれている諸現象、さらにはそのメカニズムを正確に理解し、自身が居住する地域と比較したり、相手に対して説明したりすることによって生まれるものです。こうした姿勢は、地域間の相互理解にも発展します。机上での調査分析に加え、フィールドに赴いて観察を行なうことで、問題解決のための知識が蓄積されるだけでなく、社会に対する説得力が格段に増すのです。

地域研究学域は、地理学、地域観光学、京都学の3専攻で構成されます。それぞれの学問領域の立場からフィールドにアプローチし、地域の特徴ある諸現象を捉えることとなります。空間スケールを自在に変え、多角的な研究視点・手法を交えることで、現代的な諸問題の理解と解決を目指します。

1. 地域研究学域での学びを通して、さまざまな地域で営まれる諸現象を客観的に分析・考察する能力を培うことができます。
2. 国内外の地域に関する知識の獲得とフィールドワークを通じて、諸現象のメカニズムを正確に理解する能力を得ることができます。
3. フィールドワークを伴う調査や研修で実社会との接触を図り、社会人としての基礎的素養や地域間の協働に役立つスキルを修得できます。
4. 研究成果を文章や口頭で説明することで、地域間の相互理解を目指したプレゼンテーション能力を身につけることができます。
5. GIS（地理情報システム）を中心に、地域研究を範疇として扱う教育・専門職に必要な技術を修得できます。

（地理学専攻）

【教学理念・目標】

地理学は、地表上のさまざまな現象が互いにどのような関連をもって存在しているかを空間的な観点から明らかにする学問です。研究対象には、自然現象はもちろんのこと、人間が生み出す人文現象も含まれます。それらを総合的にとらえるところに地理学の第一の特徴があるといえます。他の学問分野との交流も地理学では盛んに行なわれていますので、学問本来の性格が学際的

であることも事実です。ただし、地表における諸現象をとらえる際に、人間が主体であるという前提に立つことが、他の学問とは異なる第二の特徴です。そして、第三の特徴は、対象とされる現象は、現在のものに限定されないということです。歴史学や考古学が対象とする過去の時代における現象も地理学では研究されています。また、政策立案にも寄与していることから明らかのように、未来の構築にも貢献しています。

1. 当専攻での学びを通して、過去から未来におよぶ地表上の自然・人文諸現象を分析し考察する力を培うことができます。
2. 地理学は国際的な学問です。日本国内だけが地理学のフィールドではありません。国際化が進んだ現代社会が直面する諸問題を、多様な側面から分析し、的確な判断を下す能力を修得することができます。
3. フィールドでの観察、初対面の人々からの聴き取り調査などを通して、より詳細に事実を把握できる力を得ることができます。それによって、協調性や社会人としての基礎的な素養を修得できます。
4. 外国に関する知識の体系的な獲得や、異文化理解の力を身につけることができます。
5. 地図を製作するための測量や製図は、地理学を学んだ人だけが獲得できる技術であり、それらを修得することができます。
6. 最近の情報科学の進展はGIS（地理情報システム）の隆盛をもたらしました。世界のあらゆる場所で活用されているこの技術を駆使できるようになります。
7. 地理学専攻で修得できるさまざまな技術をもとにして、小学校・中学校・高等学校などの教育現場で重要な役割を果たす地理教育者になることができます。

（地域観光学専攻）

【教学理念・目標】

産業革命以降の近代化とともに発展してきた観光関連の産業は、今や世界最大の産業とも言われています。最新の予測によると、年間10億人以上の人々が観光活動を目的に移動を行っているとされています。長期的に見た場合、アジア諸国を始めとした新興国の経済発展、航空機産業やIT産業の発展に伴った技術革新などは、観光者の国内および国際移動をますます活発にさせます。このような世界規模での観光産業の拡大は、日本を含んだ先進国の農山村地域の再活性化のみならず、低開発国の貧困削減・国家発展等に大きく寄与しています。「家を一時的に離れ、何か非日常的な刺激（喜び・楽しみ等）を得て、再び家に戻る行為」と定義される観光活動は、個人の福祉や健康の増大に貢献するものであります。しかし一方で、観光施設の建設に伴う自然環境の破壊や観光関連産業と地元住民の間での摩擦、観光者をターゲットにしたテロリズム発生の可能性など、観光開発に伴って新たな問題が発生するのも事実であります。

そこで地域観光学専攻では、人々が生活する集落のみならず、都市、さらには国家など様々な尺度から設定できる「地域」という空間的広がり単位として、地域社会に対して経済・社会文化・自然環境面において大きな影響力を与えるまでに成長した観光現象を様々な側面から解釈し

ます。最終的には観光がもたらす様々な影響を浮き彫りにした上で、観光者およびそれを受け入れる地域住民、またこれら二つを結びつける観光関連産業の従事者すべてにとって有益な観光活動のあり方を模索することを地域観光学専攻は学びの最大の目標とします。さらに、専攻に所属する学生は地域観光学の学習を通して以下の7点の技術や能力も身につけることができます。

1. 地理学を中心としながら、社会学、文化人類学、経済学、経営学、環境学などの関連領域とも連携し、観光現象を地域観光学として総合的に理解する能力
2. 観光の理論と実践をバランスよく学んだ上で得られる、観光関連産業や観光関連専門職種に就職した際の即戦力
3. 文献を批判的に読み、観光現象のみならずあらゆる現象に関して、現状を適切に把握した上で問題を確立する能力
4. フィールドでの観察、聞き取り調査やアンケート調査を通して、事実を詳細に把握した上で問題を解決できる能力
5. フィールドワークやグループワークを通して得られる、協調性や社会人としての基礎的な素養
6. 口頭や文章で研究成果を論理的かつ正確に発表できる能力
7. 外国に関する文献の講読や、授業の一環として行われる海外でのフィールドワークを通して得られる異文化（他者）理解能力

(京都学専攻)

【教学理念・目標】

平安遷都以来、日本文化の重要な発信地であり続けた京都は、日本の他の地域とは異なる歴史的価値をもっています。今日においてもなお、多くの人を引き付ける「京都らしさ」の由来やその背景を、人文学的手法で正しく検証、解明することは、京都の文化的特色を将来的にも保証し、更には日本文化を根底から理解することに他なりません。その文化的価値の本質的な理解と発見を通じて、『京都「に」学ぶ』ということを考えます。最終的にそのことが、狭義の地域研究にとどまらない、日本文化の根源的な追究と発見につながるのです。

京都学専攻は、専攻名称にも示すように「京都」を中心とした歴史学的・文学的・地理学的アプローチを中心として、

1. 京都における伝統の形成・創出（文化的・地域的特質を考える）
2. 京都の虚像と実像の発見（文化的・地域的特質の蓄積と現代的問題を考える）
3. 時空間を超えて存続する「価値」、発見・創出される「価値」、連関する「価値」の解明（多様化する京都に対する「価値」を考える）
4. 新たな伝統の創出力の理解（現代的問題に対する解決策を考える）について深めていくことを目指します。

さらにその普遍性を発見、認識していくことで、「京都学」は単に京都に関するテーマを学ぶことに止まらず、他の地域における援用も可能であることを提唱し、日本各地、そして世界に、

日本文化とその応用力を発信することを目指します。

＜人材育成の目標＞

上記の理念に基づき設定された、歴史的・文学的・地理学的要素を備える講義・実習（フィールドワーク・インターンシップ）科目において、それぞれの知識・技能が習得できる京都学専攻では、次のような人材の育成を目指しています。

1. まちづくりの現場や景観問題の解決など、地域のプロデュースを通じて地域に直接還元することができる人材（民間企業や公務員など）
2. 地域の実態を踏まえながら、観光立国日本が目指すべき新たな道を模索できる、その担い手となりうる人材（運輸業・旅行業・宿泊業など）
3. 「総合的な学習の時間」等の教育分野での応用（教員）や文化的施策立案等の分野（学芸員）で活躍できる人材

■コミュニケーション学域

〔教学目标〕

コミュニケーション学域は、国際コミュニケーション専攻と言語コミュニケーション専攻で構成されます。ことばとコミュニケーション（日本語・英語）は人と社会のかなめとなる存在です。本学域ではことばとコミュニケーションの実践を通して深く学びます。さらに、人と文化、社会にかかわる多様な学びを通して、異文化を理解する力と英語力を身につけ、文化的実践を担うことのできる人材を育成します。

（国際コミュニケーション専攻）

【教学理念】

国際コミュニケーション専攻は、国際的教養を備えた地球市民の育成をめざす専攻です。グローバル化・ボーダーレス化する現代世界の要請に応える知識と関心を持ち、高度な言語知識と英語運用能力を生かして国際社会の担い手となれる人を育てます。この専攻に所属するみなさんは、第一に、現代の国際社会が抱えるさまざまな問題に立ち向かう洞察力と行動力の獲得をめざします。そのために、人文学的エリアスタディの一環として世界の英語圏地域を中心に広く学び、文化や民族の摩擦と共存、多元文化環境での集団と個人、グローバル環境での表現と言語について、複数の研究領域をまたいで学習・研究します。第二に、言語知識と英語運用能力に関しては、日本語や英語のしくみやこれらの言語の社会的役割を深く理解し、かつ活動手段として駆使できる力を身につけます。そのために、専攻独自の科目で言語と言語文化について学び（英語学・文化研究）、英語で情報を取得・発信し（実践的英語学習）、言語教育の役割や英語を教える（学校英語教育）ことについて研究します。最終的には卒業論文の執筆を通じて、世界のさまざまな現象を主体的に考え、論理的に表現できることを目指します。

【教学目标】

国際コミュニケーション専攻は、グローバル化・ボーダーレス化する現代世界で主体的に行動するために必要な知識と関心を持ち、高度な言語知識と英語運用能力を生かして国際社会の担い手となれる人を育てます。そのために、本専攻でみなさんは次のような力を身につけます。

1 国際社会における多文化・多言語共生についての基礎をなす知識を有し、他の人文学的知と連携することができる。

（知識）

2 国際社会における多文化・多言語共生に関わる専門的な知識を有し、社会に貢献できる。（知識）

3 専門的なテキストや資料を日本語と英語で批判的に読解する能力を有する。（能力）

4 文章および口頭での高度な表現力・専門的コミュニケーション能力を有する。（能力）

5 専門的知識をもって社会に参画しようとする意欲・行動力に富む。（態度）

6 伝統・文化を発展的に継承しようとする責任感を有する。（態度）

(言語コミュニケーション専攻)

【教学理念】

人間はことばによって社会を築きます。社会はことばにより共同体のきずなを深め、文化を伝えます。人はことばを通して思考し、世界を理解し、思いと感動を伝え、それを芸術に高めます。ことばとコミュニケーションは人が社会に参加し、文化的実践を行うかなめです。ことばはなによりも人間が生活のなかで実践し、文化を生み出すものです。話しことば、書きことばによる実践を豊かにし、思想の表現と伝達の力を高めることは人間の可能性を大きく飛躍させます。

ことばは文化を築きながら、しかもなお、異文化の壁を越える力ともなります。国際化が日常生活の一部となった現代社会において、日本語教育の重要性はさらに高まり、それとともに第二言語教育を実践する高度な力が求められています。ことばを学び、教えることについての深い理解にもとづく教育実践はわが国の国際化に大きく寄与するものです。

言語コミュニケーション専攻はことばとコミュニケーションを実践的に学び、研究する教育プログラムです。ことばとコミュニケーションの教授と研究を通し、人とことばにかかわる人文学の新境地を切り開き、社会に貢献することを本専攻はめざしています。

【教学目标】

言語コミュニケーション専攻はことばとコミュニケーションについて深く理解し、ことばによる実践の力を身につけ、人間の可能性を切り拓き、市民社会をさらに発展させる力をもった学生を育成することを目的としています。本専攻でみなさんは次のような力を身につけます。

1. 人とことばについて深い理解をもち、ことばに対してとぎすまされた感性を身につける。
2. 話しことばにより、情景をわかりやすく描写し、また、考えを的確に、効果的に伝えるなど、目的にそったコミュニケーションができる。
3. 解説文、評論文、紀行文など目的にそった、わかりやすい文章を書くことができ、物語文やシナリオなどを想像力豊かに創作することができる。
4. 文学作品を深く理解し、作品の意図するところを音声で情感をこめて表現することができる。
5. 日本語を外国語として客観的に見つめなおすことで、日本語と日本文化の特徴を理解し、外国語として日本語を学ぶ人の視点で日本語を効果的に教えることができる。(将来、日本語教員をめざす人)
6. ことばについての疑問をみずから解決する力をも身につけ、ことばについて新たな知見を創出することができる。
7. 人とことば、コミュニケーションに関する深い理解のもとに、社会に積極的に参加し、その発展に寄与しようとする態度を身につける。